

伝統意匠に基本性能を高める …… S邸離れ



左:改修後、

中庭より離れを見る。
外壁は木造1時間耐火建築物の福祉施設で検討した防火サイディング（焼杉調と漆喰調）で仕上げた。

サイディング特有のテカリも無く、思ったより落ち着いた風情が好ましい。

下:改修前の離れ

和瓦、真壁、杉板、漆喰による伝統意匠。

2015年から進めていた計画の第一期工事が完成する。地元古民家の代替わりに伴う母屋、離れの耐震改修工事が基本方針だったが、あまりの断熱性能の無さに、同性能を高める工事を合わせて行なう事を提案した。但し“古民家の風情を残した意匠を！”が施主と設計者の共通の思いだ。

「耐震改修」は入母屋の形を変えずに軽量瓦に葺き替え、基礎の大きなクラックは特殊な繊維を使った特許工法を埼玉からの出張工事で補強した。工事費には全く及ばないが、市の耐震補助申請を行い設計と工事費双方の補助金を受け取る事も出来て、建替えよりも相当ローコストに納まった。



手前は改修後の離れ。奥はこれから改修予定の母屋

「断熱改修」については、屋根を2重垂木にして全面にネオマフォームを敷き詰め、外壁もネオマフォームを全面に貼り詰めた上に合板を張り、その上に焼杉と漆喰風のサイディングを張り別けて以前の意匠に合した。基礎にも防蟻スタイロフォームを貼った上にPGモルタルで仕上げた。…つまり“外断熱”の設計である。サッシをトリプルに取替えれば、と思ったが窓も小さく施主の理解もありペアになった。今回の方法であれば住みながらでも内部は殆ど工事の影響がない事の検証が行えた。耐震性や断熱性が劣ることから、伝統様式民家が簡単に解体される風潮に疑問を持ち続けている設計者にとって、大変有意義な事例であり、ひとつの解答例として、近隣での普及にお役立てればと思う。